

現代中国語における結果補語の 意味及び構文的特徴

黄 春玉

1. はじめに

本研究は結果補語の分類とその意味・構文的特徴について考察するものである。

結果補語には様々な意味・構文的特徴が見られるが、補語と述語の関係からみれば、次の例文のように補語が述語に従属¹する場合と従属しない場合の二つの関係しか存在しない。

- (1) 厘孀欺阻慕²。
- (2) 厘忘篤阻慕。

例文(1)の補語“到”は述語動詞“孀”と係り、述語の結果達成の意味を表わすので、“孀”に従属していると考えられる。一方、例文(2)の補語“篤”は賓語“慕”に係っているので、述語動詞“忘”に従属しないと考えられる。そして述語に従属する補語と従属しない補語とは意味及び構文上には様々な異なる特徴が現われる。従って、本研究はまず補語と動詞の関係³を基準にして、結果補語の分類を行ない、それを基に各類型における意味及び構文的特徴を分析していく。

2. 結果補語の分類

2.1 概 念

結果補語は構文的には動詞に後置し、動作や変化などによって生じた結果を表わすと一般に定義されている。この定義に従えば、次の二つの問題が生じてくる。

第一には結果が生じる主体の問題である。つまり、結果補語が文のどの成分の結果を表わすかをまず明確にしなければならない。先行研究ですでに明

らかであるように、結果補語の説明の対象は述語動詞に限ってはならず、主語あるいは賓語を説明する場合もある。依存文法の見地からいえば、主語と賓語は述語の共演成分⁴であるが、結果補語が主語と賓語の共演成分になることは結果補語が補語の文法機能を超えて、述語の文法機能を担っていると言わなければならない。つまり、結果補語は述語の文法機能を兼有し、一種の特異な補語であるということができる。

第二には結果補語と述語動詞の関係である。結果補語の表わす結果は動作や変化などによって生じたものであるとすれば、動詞と補語の関係は因果関係にあるということになる。表現例をみると、動詞と補語の関係は因果関係であるものと、そうでないものがある。

- | | |
|-------------|------|
| (3) 頃惶恭押阻。 | (因果) |
| (4) 卅捲択酷阻。 | (判断) |
| (5) 厘択欺卅捲阻。 | (達成) |
| (6) 宮宮海互阻。 | (変化) |

例文(3)の結果は述語動詞によって生じたものであるので、動詞と補語の関係は因果関係にあるが、(4)(5)(6)は因果関係ではない。(4)(5)(6)の動補関係については後述するが、(4)の補語は命題に対する判断である。(5)の補語は動作の結果の達成を表わしている。(6)の補語は述語動詞の変化を表わしている。このように、補語と述語は因果関係だけではなく、多様な関係にあるのである。

以上、補語の共演成分と補語と述語の関係の二側面をみてきた。その結果、従来の結果補語の定義には様々な問題点の残されているということが分かった。上の検討を含めて、本稿は次のように結果補語の定義を設定する。

結果補語の定義：

結果補語は構文的には述語動詞に後置し、統語的には主語、述語、賓語を共演成分とし、意味的には共演成分の動作、行為、変化、作用などの結果を表わす。

2.2 分類

結果補語の共演成分は主語、述語、賓語の三つであるということは前節で述べたが、それには次のような表現例をあげることができる。

- (7) 蹀。了 <主語共演>
 (8) 醮蛩。李賓語共演>
 (9) 跣虻。书 0<述語共演>

述語と補語の二者の関係からみると例(7)と(8)には共通性がある。つまり主語共演と賓語共演の場合は補語は述語に依存せず、直接主語または賓語にかかわっており、述語とは独立的な関係を成している。従って、この場合では(10)(11)のように補語を述語とした表現が成立する。

- (10) 跣。。
 (11) 刳。。

しかし、例(9)は例(7)と(8)とは異なっている。例(9)の補語“到”は述語動詞“扱”の結果達成の意味を表わしており、補語が単独で述語となる表現は成立しない。それは前述のように述語共演の場合は補語が述語に依存しているからである。従って、述語と補語の二者の関係を基準にして、まず、結果補語を独立と従属の二類に分けることができる。独立類結果補語には主語共演と賓語共演の二つのあることは前述したが、次のように主賓共演の場合もある。

- (12) 。 话

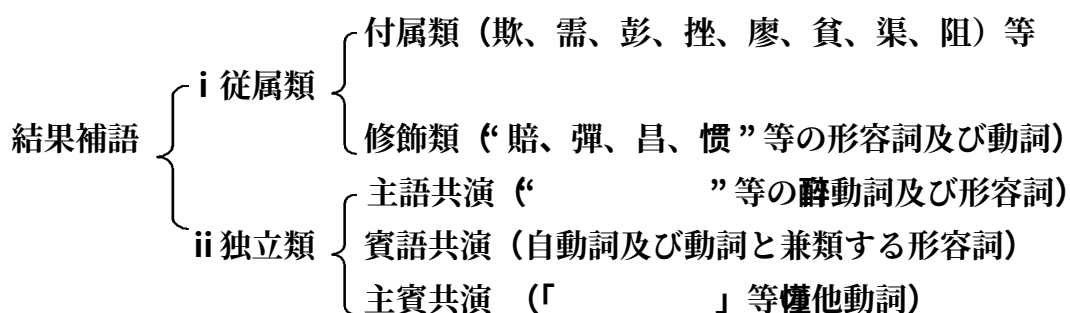
文中の補語“峡”は主語の“我”と賓語の“三”のいずれともかかわっている。従って、独立類には主語共演、賓語共演、主賓共演の三つの場合のあることがわかる。

次に従属類の下位分類であるが、まず従属の概念から考えてみよう。意味的側面の従属には二つの場合がある。一つは「主要素が意味的に非自立的、不完全であって、従要素がその意味内容を補充する働きをする場合」である(寺村 1991、p.230)。この場合はある主要素は意味的に「不完全」であり、従要素の付加により、その主要素の意味内容が「完全」になる。この場合の主従要素の結合は意味的に一つの「完全」な意味範疇が生成されるので、「内的結合」ということができる。いま一つは、従要素は主要素の「意味内容を詳しく述べるために付加されている」という場合である(寺村同上)。この場合の主従結合は従要素は主要素の意味範疇に入るのではなく、主要素の意味内容を説明する働きをする。従って、この場合の結合は「外的結合」という

ことができる。「内的結合」の一つに“ 孀欺 ”が挙げられる。“ 孀 ”には結果達成の意味はないが、“ 孀 ”に“ 欺 ”が付加されて始めて「結果達成」の意味となる。そして、“ 孀 ”と“ 欺 ”が一つの意味範疇を構成する。本稿では“ 到 ”のように動詞と「内的結合」を成している結果補語を「付属類結果補語」と呼ぶことにする。「外的結合」の一つに“ 心賠 ”が挙げられる。補語“ 清 ”は動詞“ 看 ”に後接して、動詞と一つの意味範疇を構成されるのではなく、その動詞の結果的説明の働きをする。“ 清 ”のように動詞と「外的結合」を成している結果補語を本稿では「修飾類結果補語」と呼ぶことにする。

付属類結果補語が独立の語として使われるときは実詞の意味を有しているが。これらの語が補語として使われるときはその実詞の意味が失われてしまい、結果達成の意味を表わすことになる。付属類結果補語には“ 彭、廖、挫、需、貧、欺、渠、阻 ”などがある。修飾類結果補語⁵は述語を意味的側面から詳しく述べるために付加された成分である。この類の結果補語には“ 灘 清 ”などのような形容詞がある。このような形容詞は“ 字很清楚、音很准 ”のように使われ、事物の結果の状態を表わすことができる。一方、“ 究 ”のように“ 體貼 ”を付加して、副詞として用いることができる。このように意味上、この類の結果補語には動詞を修飾する意味と事物の結果の状態を表わす意味の二つの側面がある。

以上、結果補語の分類を行った。この分類は次のようにまとめられる。



3. 結果補語の意味役割

ここでは補語が意味的に中心的な役割を担うか副次的な役割を担うかについて論じる。

補語が文の中で副次的な意味役割を果たしているということはすでに一般的な見解になっている。しかし前章の分析ですでにわかるように、補語は述

語に従属する場合と従属しない場合がある。述語に従属する補語の意味役割は副次的であるが、従属しない場合は補語が副次的な意味役割を果たしているとはいえない。次は本稿の分類に基づいて補語の意味役割をみてみよう。

3.1 付属類

第二章においては、付属類結果補語は意味的に前接動詞に融合し、動詞の結果達成の意味を表わすものとした。そうであれば、付属類結果補語は意味的には動詞に付属し、文の中で付属的な意味役割を担っているといえることができる。次の例文をみてみよう。

(13) 厘識脱刊挫世捲。

(供早旗燕恬)

①厘識脱刊世捲。 ②*厘識脱挫世捲。

上の例文の補語と述語をそれぞれ省略すると、文①と文②になる。文①と文②を比較してみると、文①のほうは意味的に上の例文と大きく変わっていないが、文②のほう是非文となる。従って、述語が文の中心的役割を担っており、補語が付属的な意味役割を担っているといえることができる。

3.2 修飾類

修飾類には修飾と判断の二つの用法がある。この二つの用法では補語の果たす意味役割は異なっている。修飾用法の補語は述語動詞の結果の状態を詳しく説明する意味役割を果たしている。つまり、意味的には述語動詞を修飾説明しているのである。従って、この類の補語は副次的意味役割を果たすことが明らかである。

判断用法は動作主の動作の結果に対する話者の判断であり、「基準に合わない」という意味を表わす。補語が話者の気持ちを表わし、動詞が補語の判断する対象となるとしたが、そうであれば、補語が中心的意味役割を果たしていることになる。次の例文で検証してみよう。

(14) 椎嫌鯨隅航互阻，啗乎詰泣隅航。

①？椎嫌鯨隅航阻，啗乎詰泣隅航。

②椎嫌鯨隅互阻，啗乎詰泣隅航。

上の例文では補語を省略された文①のほうは上の例文の意味と大きく違っている。述語を省略した文②のほうは意味的には例文と大筋変わっていない。従って、補語が中心的意味役割を担っているということができる。

3.3 独立類

独立類結果補語には主語共演、賓語共演、主賓共演の三つの場合がある。まず、主語共演からみていく。

3.3.1 主語共演

補語が主語と共演する場合、補語は主語の結果の状態を表わす。この場合の述語動詞には主語の動作を表わす場合と主語以外の他者の動作を表わす場合の二つの場合がある。述語動詞の動作が主語の動作である場合は文の主語は「施事主語」であり、述語動詞の動作が主語以外の他者の動作である場合は文の主語は「受事主語」である。「施事主語」の場合、たとえば、「磨哉恪阻」のような文では主体の結果は主体自身の動作によって引き起こされたものであるので、受動の意味が含まれない。従って、「*磨瓜哉恪阻」のように「被」の付加は認められない。一方、「受事主語」である場合は主語の結果は主語以外の他者の動作によって引き起こされたものであるので、受動の意味がある。「世捲匆瓜嬉物阻」のように「被」の付加が許される。「施事主語」であれ、「受事主語」であれ、補語が述語の動作によって、引き起こされた結果を表わしている点においては、両者は一致している。このことは結果を引き起こした要因の質問文と返答文から検証できる。

(15) 世捲匆嬉物阻。 → 世捲奕担物阻? (頁瓜噫嬉議)

(16) 磨哉恪阻。 → 磨奕担恪阻? (頁徭失哉焼哉議)

上の検証で分かるように、質問に対する答えはいずれも補語の結果に至らしめる原因の説明であり、述語がその原因である。従って、補語の結果は述語の動作によって引き起こしたものであるということができる。つまり、主語説明の場合は動補関係は因果関係にあるということになる。そうであれば、主語説明の場合では述語が「原因」であるので、副次的意味役割を担い、補語が「結果」であるので、中心的意味役割を担うということができる。

3.3.2 賓語共演

補語が賓語と共演する場合は賓語の結果は動作主の積極的な動作によって生じた結果と動作主の間接的な動作によって生じた結果の2つの場合がある。本稿では前者のような賓語の結果は動作主の積極的な働きかけによるものを「使役結果」と呼び、後者のような賓語の結果は動作主の間接的な動作によって生じたものを「原因結果」と呼ぶことにする。使役結果の場合の述語動詞は通常他動詞であり、原因結果の場合の述語動詞は通常自動詞である。使役結果の場合は次の例のように、述語は賓語の結果を至らしめる積極的な動作であるので、文の中心的意味役割を果たしていると考えられる。

(17) 他容佰阻宮宮。(磨容宮宮潤惚聞宮宮佰阻)

(李 1993 からの借用)

(18) 磨嬉図阻頃徨。(磨嬉頃徨潤惚聞頃徨図阻)

原因結果の場合は次の例文のように、述・補の意味役割関係が複雑になる(例文は李 1993 からの借用)。

(19) 磨且易阻遊。

(20) 弍頃図佰阻第第。

(21) 磨断、祐阻曉徨。

原因結果の場合は賓語の結果は主語の働きかけによるものではなく、主語の動作が賓語の結果の間接的原因である。因果関係の側面から考えれば、述語が「原因」であるので、副次的意味役割を果たしており、補語が「結果」であるので、中心的役割を果たしているといえそうにみえるが、実はそうとはいえない。というのはこのような表現には、もう一つの意味的側面があるからである。つまり、補語の表わす結果は述語動詞の程度として理解することができる。ゆえに上の例文には次のような読みがある。

磨且易阻遊。 → 磨且誼遊窟脅易阻。

弍頃図佰阻第第。 → 弍頃図誼第第脅佰阻。

磨断、祐阻曉徨。 → 磨断、誼曉徨脅祐阻。

このように理解すると、補語は述語の程度を説明しているので、副次的な意味役割を果たしていることになる。

次の例では述語は他動詞であるが、この他動詞は賓語に直接に働きかける

ものではないので、自動詞と同様、間接的原因とみなされる。

(22) 磨断価壘阻曾翠懲下。 (李 1993 からの借用)

この文における述語“価”は、直接に賓語“懲下”に関わっていない。この“価”は例えば“価互徨”などの動作であって、間接的に“懲下壘阻”の結果を招来する原因となっている。このような表現も例文(19)(20)(21)と同様二つの側面があり、述語と補語のいずれが中心的であるかを確定することはできない。

3.3.3 主賓共演

結果補語は主として、形容詞や自動詞から構成されるが、次の例のように他動詞結果補語の場合もある。

例えば、(次の例文は李 1993 からの借用)

(23) 厘油峽低傍議三阻。

(24) 磨怒卿阻匯委埒革。

文中の補語は他動詞であるので、補語は主語と賓語の二つの成分とかがわっている。従って、補語は文の主要成分であり、中心的意役割を果たしている。

以上、意味役割の側面から、結果補語をみてきた。この考察により、文中における補語の意味役割がその類型によって異なっていることが明らかとなった。以上の考察は次の表にまとめることができる。

結果補語の意味役割表

類 型	付 属		修 飾				独 立					
			修飾用法		判断用法		主語共演		賓語共演		主賓共演	
述補成分	述	補	述	補	述	補	述	補	述	補	述	補
意味役割	中	副	中	副	副	中	副	中	不確定		副	中

4. 受身表現からみた結果補語の構文と意味的特徴

4.1 受身表現にみられる結果補語構文の相違

本稿では第二章においては補語と述語動詞の関係から結果補語を従属と独立の二類に分けた。その従属性と独立性は受身表現にも顕著にみられる。

(25) 弑藍心需阻弥嶄。

(26) 厘抱諸阻慢。

(27) 磨容佰阻宮宮。

(李 1993 からの借用)

例(25)と(26)の補語は述語に従属しているので、述語とは意味的に分割できない。例(27)の補語は賓語に関わっているので、述語とは意味的に分割できる。従って、例(27)は次のように分解して知的意味は変わらない。

磨容佰阻宮宮。 → 磨容阻宮宮，宮宮佰阻。

更に上の三つの文を受身表現に変換して次の図に示されているような分析が可能となる。

(25) ´	弥嶄	瓜弑藍心需阻
(26) ´	慢	瓜厘宇諸阻
(27) ´	宮宮	瓜磨容 佰阻

例(25) ´ と(26) ´ は補語が述語に従属しているので、受動文では補語と動詞は等価の成分として「被」構文の述部に収まるが、一方、独立類は補語と述語が分割できるので、受動文では補語が直接に主語と関わり、述部の主要成分とし、述語が「被」構文と一緒に修飾節に収まり、補語の結果を至らしめる原因とみることが可能となる。

4.2 原因を表わす「被」構文

前節では「被」構文が補語の表わす結果を至らしめる原因とみることができるとしたが、ここではこのことについて詳しく調べることにする。まず、次の例文を見られたい（例文は李 1986 からの借用）。

(28) 装析励瓜肩軒彌廖囊穎阻。

(29) 磨瓜寄零孳廖音需阻。

例文(28)と(29)は構文的には似ているが、実際には異なる二つのタイプの文

である。文(28)では「被」介詞フレーズが述部を構成しており、動詞“彌廖”と“囊穎”の動作主は同じ“政府”である。文(29)では動詞“孳廖”と“音需阻”は同じ動作主の動作ではない。“孳廖”の動作主は“寄零”であり、“音需阻”は文中の主語“他”を説明している。従って、文(29)では動詞“音需阻”を「被」介詞フレーズにおさめるのは無理である。文(29)の「被」介詞フレーズは“瓜寄零孳廖”だけである。つまり、「被」介詞フレーズは連用修飾成分になっている。このことを図で示すと次のようになる。

(28)	装析勵	瓜眞軒彌廖囊穎阻
(29)	磨	瓜寄零孳廖 音需阻

文(28)では述部の「被」介詞フレーズは一つのまとまった成分として、主部と対立している。文(29)では述語が二つの階層に分かれ、「被」介詞フレーズは修飾節の中に収められており、原因を表わしている。

「被」が原因を表わすことは更に次の二つの面から論証することができる。

1. 「被」は動作主を表わすマーカーではない。

今までの研究では「被」は受動文における動作主のマーカーとされてきたが、次の例ではいずれも「被」は動作主のマーカーとは考えにくい。

- (30) 徽塩磨脅音壓吭, 峪畠 (瓜宸嶽源酷袞鯖議賑荊) 柿恪阻。
(供早旗燕恬)
- (31) 怡洗歎議幻牌 (瓜溺隅議佩強) 妾岐阻。
(白忽課)

上の例文はいずれも「被」は動作主のマーカーとは考えられず、結果を至らしめる原因と考えるのが妥当である。

2. 「被」は「是～的」構文に収められる。

装垠鯖(1983)は「“是～的”内の動詞によって表わされる動作が既存の原因である。」(p.655)と述べている。

- (32) 慢断議槻繁祥頁瓜皆海蝕囊嬉棒議。
(供早旗燕恬)
- (33) 椎頁厘銚牌議圪至, 慢頁瓜低断孵張棒議。
(白忽課)

上の「被」構文はいずれも原因説明として使われている。

以上の分析から、「被」構文に原因を表わす意味役割のあることが明らか

となった。

4.3 受身表現における独立類結果補語文の特徴

以上、4.1 と 4.2 において、受身表現では独立類結果補語と述語動詞を分けて検討し、述語動詞が「被」構文の節に収まることから、補語の表わす結果を至らしめる原因とみることが可能であることを述べた。このように分析することにより、独立類結果補語文の独特の意味及び構文的特徴が明確となった。次の例をみてみよう（例文は木村 1992 からの借用）。

(34) ?? 墳遊壺宜阻式藍。 → 式藍瓜墳遊壺宜阻。

(35) ?? 式川牢壘阻世捲。 → 世捲瓜式川牢壘阻。

上の例文においてはいずれも能動表現は極めて不自然であるのに対し、受動表現は自然な文である。このことについて、本稿は次のように説明する。仮に例(34)の能動文が成立するとすれば、3.3.2 で述べたように、これは「使役結果」の文であると考えられる。つまり、他動詞“壺”は動作主“墳遊”の積極的な動作であり、賓語“式藍”の“宜阻”の結果は動作主“墳遊”の積極的な“壺”の動作による結果であるとなる。しかし、実際には“墳遊”はそのような動作主の格（意味的な）には適していない。従って、この文は成立しにくい。

例(35)も例(34)と同様、「使役結果」の文である。仮に例(35)が成立するとすれば、動作主“式川”が積極的に“洗”の動作をし、賓語“衣服”を“壘阻”の結果に至らしめるということになる。当然現実にはこれはありえないことである。従って、例(35)も成立しない。

一方、受動表現では結果補語の表わす結果と結果の主体が文の焦点となり、動作主とその動作が原因を表わす「被」構文に収められる。そして、動作主とその動作が修飾節の「被」構文に収まることにより、動作主とその動作の関係が中和されると考えられる。このように分析すると、例(34)の受動文は次のように説明できる。主語“小王”とその結果の“倒了”は文の一次的な意味である。“瓜墳遊壺”は修飾節であり、二次的な意味である。「被」構文が原因を表わし、“墳遊”と“壺”の関係が中和されることにより、この例文を「王さんが倒れたのは石に躓いたためである」と解釈することができる。従って、例(34)の受動文が成立するのである。同様の原理で例文(35)の受動

註

- ## 引用文献

- 石綿敏雄 1983 「結合価からみた日本文法」『文法と意味Ⅰ』pp.82—110
水谷静夫他著 朝倉書店
- 木村英樹 1992 「BEI 受身文の意味と構造」『中国語』1992年6月号
pp.10—15 内山書店
- 寺村秀夫 1981 『日本語の文法（下）』国立国語研究所 大蔵省印刷局
———1991 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
- 李 定 1984 < “补个 个”> << 符 >> pp.495—503 料
镅 镅 镅 霨 嫫 繆
- 1993 『中国語文法概論』宮田一郎訳 光生館
- 刘 华 1983 『現代中国語文法総覧』片山博美他訳 くろしお出版
- 吕 迷 1980 『中国語用例辞典』牛島徳次監訳 東方書店